

水稻用 有機育苗培土
自然育苗用土・自然育苗養分 使用説明書

稲の有機苗 育苗法



**育苗の
温度管理は低めに**

当社の有機JAS規格に適合する自然育苗用土、自然育苗養分の特徴と使用方法を説明しております。
最後の頁に土、種もみの選別・消毒の大切なポイントも説明しております。

(有)花巻酵素

自然育苗用土、自然育苗養分の特徴

自然育苗用土 自然土(赤土)に発酵させた有機質を配合した稲のための床土です。化学的な成分は全く含んでおりませんので有機JAS規格に適合します。有機質ながら即効性がありますので初期成育が良好で根はりが良く丈夫な苗に育ちます。また肥効の持続性もありますので追肥もほとんど不要です。有機米の苗づくりに最適です。使い方は一般の市販培土とまったく同じです。

自然育苗養分 は自然育苗用土の土無しタイプで別途自然土と混合して使用します。

【自然育苗用土】

重量：20kg（変動があります）

苗箱枚数：7枚分（覆土除き）

成分：窒素 0.30%

リン酸 0.75%

カリ 0.48%

C/N比 14.0

（有機質肥料の特性上成分には若干の変動があります）

原料

自然土(赤土)

大豆油かす

米ぬか

オカラ

貝化石

わら(粉碎)

もみ殻(粉碎)

ライズ菌(酵母,乳酸菌,

麹菌等の複合菌)

【自然育苗用土】



有機 JAS 規格適合

原料のわら・もみ殻は苗の生育環境をできるだけ田圃に近づけるという考えに基づいて使用しています。
※わら・もみ殻はライズ菌で十分に発酵処理しておりますので、これらによる病原菌の心配は全くありません。

【自然育苗養分】（自然育苗用土の土無しタイプ）

自然育苗用土の自然土の割合を少なくしてほとんど発酵有機質だけにした製品。別途自然土と約 1：9 の割合で混合して使用。自然土と混合したものは自然育苗用土と全く同じものになります。

※原料の種類は自然育苗用土と全く同じです。自然育苗養分に赤土を規定量混合したものが自然育苗用土です。

重量：12.5kg 苗箱枚数：48枚分（一枚当り 260g）

混合用の自然土量：120kg(一枚当り 2.5kg、覆土除き)

成分：窒素 2.7% リン酸 1.2% カリ 1.2% C/N比 6.7

（有機質肥料の特性上成分には若干の変動があります）

※自然土に砂質の強い土は用いないでください。

【自然育苗養分】



有機 JAS 規格適合

自然育苗用土の肥効期間

肥料成分が即効的に溶出し 40 日以上持続しますので、追肥無しで稚苗から成苗まで使用できます。

※播種時期が遅い場合や育苗期の気温が高い場合、有機質の発酵が促進するため肥効期間が 40 日以下になることもあります。

自然育苗用土、自然育苗養分使用上の注意点

◎出芽時の床土の温度管理

自然育苗用土と自然育苗養分には発酵した有機質が含まれておりこれが発酵分解されて苗の肥料となりますが、このとき発酵熱が発生します。この発酵熱は中盤以降の苗の生育には全く問題有りませんが、まれに初期の出芽時に 30℃以上になって高温障害が発生し出芽遅れを引き起こすことがあります。

そのため、苗箱の床土にガラス温度計やデジタル温度計を差し込んで温度管理を行って下さい。

温度計の例



ガラス温度計



デジタル温度計



デジタル温度計
(コード式)

特に “育苗機による出芽” と “ハウス平置き式無加温(ベタ張り)出芽” の場合は必ず温度管理を行って下さい。

※障害が発生したときの対策は「自然育苗用土・養分による稲の育苗の疑問とトラブル対策」を御覧ください。

◇ 1 播種方法 ◇

1.(自然育苗養分の場合)

自然育苗養分と別途用意した自然土を播種の直前に約 1:9 の割合で混合して自然育苗用土を作ります。

混合割合：自然育苗養分 1 袋(12.5kg)に自然土 120kg

※自然土の乾燥具合にもよりますが、水分がある程度残っているものと混合してから播種まで 1 日以上あると発酵が進み菌糸が出て用土の透水性が悪くなります。

2.苗箱への用土入れ(播種機にも可)

播種は一般の培土と同様に行います。苗箱に用土を入れて床土にし、モミを播種します。その上に自然土で覆土します。覆土は自然育苗用土でもかまいませんがモミの出芽による覆土の‘持ち上がり’が自然土より出やすいです。

※苗箱への用土入れは透水性が悪くならないように播種の直前に行います。

自然育苗用土には水分がありますので用土入れは播種の直前に行います。

◇ 2 出芽方法 ◇

【出芽時の温度管理の詳細は別紙「自然育苗用土・養分による稲の育苗の疑問とトラブル対策」を参照】

育苗機

- ・ 育苗機を使用する場合、自然育苗用土の発酵熱が出ますので高温障害を起こさないように温度は慣行よりかなり低めの 25℃以下(20℃でも良い) に設定して下さい。また、育苗機の内部に積み重ねた育苗箱の中心部に温度計(ガラス温度計、デジタル温度計等)を入れて温度を常時監視できる様にして下さい。
※化学肥料入り培土とは設定温度が違いますので、一緒の育苗は避けてください。
※温度を低く設定しても苗箱内の温度が発酵熱で設定温度以上に上がる場合があります。30℃を超えると高温障害で出芽遅れが起こる可能性もありますので、速やかに苗箱を育苗機から出してハウスに並べてください。
- ・ 育苗機で出芽後ハウスに苗箱を並べたときハウス内の温度が高い場合、苗箱の温度が育苗機内以上に上がり苗に障害が出ることもありますので、ハウス内の気温は 28℃を超えないようにします。

ハウス平置き式無加温(ベタ張り)

- ・ 自然育苗用土の発酵熱の影響で温度が高めになる場合がありますので、温度管理は十分に行ってください。ハウス内の気温は 28℃を超えないようにします。
ハウス中心部の苗箱の床土の温度の上限は 30℃で管理して下さい。
- ・ 最近の 4 月中旬の育苗初期の気温は 20℃前後のときがあり、ハウス内では 30℃を超えることも考えられますので、低温、高温での出芽障害が出ないように対策は吟味して下さい。

非推奨方法

積重ね出芽方法は推奨しません

- ・ 積重ね出芽方法にしますと内部が高温になりやすく出芽ムラにつながりやすいので、この方法は行わないで下さい。
※ ただし、積重ね内部の温度を見て 30℃を超えないように積み換え(内部と外部を入れ換える)を随時おこなえば温度上昇を止めることができますので積重ね方式も可能です。

◇ 3 育苗方法 ◇

プール育苗を推奨します。 プール育苗は省力、病気予防の点で勝っており、特に有機育苗では病気の予防が非常に大切ですので、病気対策としてもプール育苗をお奨めします。もちろん従来の育苗方式(かん水育苗)にも十分適応します。育苗期間中の温度は病気予防のため 28℃以下にします。

プール育苗

- ・有機質による育苗ではカビの発生のために苗箱の透水性が悪く、苗の初期成育に遅れのみられるときがあります。プール育苗では苗箱に十分に水が回りますので透水不良による生育遅れの改善になります。
- ・一部に立ち枯れ症状が発生しても拡大しにくいです。
- ・プール内の水が外気温の急な変化から苗を保護します。水の保温作用のため低温障害を予防します。日中に水温が上昇しすぎた場合はハウスのビニールシートを開放して通風を良くします。遅霜の心配がなくなったら夜間も側面のシートは開放しておきます。
- ・かん水はプールに水を注ぎ足すだけなので非常に省力です。
- ・プール地面の均平は吟味して行って下さい。水入れしたとき水位に片寄りがありますと浅いところの温度上昇により苗立枯細菌病などの病気が発生しやすくなります。
- ・低温のときはプールへの注水口をたまに移動して生育むらを防ぎます。

【プールへ水を入れる時期】

1.5 葉頃または 1 回目の灌水時期。最初は苗箱の深さ(3cm)まで。

※プール状態にする時期の前に苗に病気の兆候がでたら直ちに水を入れますと病気の抑制になります。

※苗箱を並べる前日にプールに水を 2cm 位入れ日光でいくらか温めておきそこに苗箱を並べる方法もあります。苗の病気予防の面からはこの育苗開始からプール育苗にするのが一番効果的なようです。また、この方法ですと床土に確実に水が回りますので透水性が悪いために発芽が遅れているモミの出芽促進にもなります。

【水の管理】

床土の表面が水面から出ないように水位を保ちます。

プールの水の交換は原則必要ありません。

プールの水温が気温の関係で 28℃以上になった時は病気の発生する可能性がありますので水を入れるか、温度を見ながら水を入れ替えて水温を 28℃以下にします。ただし、急に水温を下げすぎ(15℃以下)ますと苗に影響しますので適度にします。

かん水育苗(従来の育苗)

- ・自然育苗用土の発酵熱により苗箱の温度が上がり水分蒸発が早まる場合もありますので、生育障害を防ぐために苗箱を乾燥させないよう特に注意してかん水を行います。
- ・ハウスの温度上昇には特に注意し、小まめにハウスの開閉を行います。

※育苗の適温は 15～25℃です。一般に苗の病原菌は 25℃をこえると活動が活発になってきます。また 15℃以下では低温障害が発生します。

